

---

# あした。世界のまんなかで

改札口

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

あした。世界のまんなかで

### 【コード】

N8873D

### 【作者名】

改札口

### 【あらすじ】

チンピラから取り上げた緋色の袋。その中身には秘密があつて…。  
…。雨の日に起こった少し不思議な物語。

あした。世界のまんなかで

頭の上にはただ、血色の空が転がっているだけ。

寂れた商店街。その裏路地で、俺は仰向けでひっくり返って薄汚れた建物の間にある空を見つめていた。

周囲にあるのはひっくり返ったポリバケツと、盛大に散らかった生ごみ。そして腹を抱えて倒れている数人のガラの悪い男どもだ。

右手をついて立ち上がるうとするが、鈍い痛みが走って思わずまた腰を冷たいコンクリートにつけてしまった。

「だっせーの」

俺は一人苦笑いをしながら今度はしつかり立ち上がる。汚れのついた制服を軽く叩いて、ついでに足元に転がっていた男の背中を思い切り蹴飛ばす。そのまま立ち去ろうとした俺だったが、ふと足を止めた。

足元に財布が転がっていたのだ。

緋色の紐で口を閉じられている小さなそれは、今地面に転がっている連中とはあまりにも似つかわしくない。

思わず拾い上げたとき、誰かが俺の足を掴んだ。

見るとさつき背中を蹴り上げてやった男だった。

「頼む。それを返してくれ」

「これお前のなのか？」

苦しそうに頷く男の顔は、他の男達と変わりはなく、いかにも遊んでます。といった顔つきで、薄汚れた金髪も耳に開けたピアスもなんら変わりはない。

俺は何も言わず、袋を開けようとした。

「やめろ。開けんじゃねえ」

あした。世界のまんなかで

男はそう言っただ袋を奪い取るうとするが、その手は虚しく空を切る。

「お前自分の立場分かってんの。何命令口調になってんだよ」

そう言っただ男の腹に蹴りを入れる。

「ほら返してくださいだろ」

「か、返してください……」

間髪入れずに言っただ男を見下ろし、俺は正直驚いた。

このての男っていうのはやたら自信過剰な奴が多いので、素直に頭を下げる奴は少ないのだ。それに自分達から喧嘩を売っただ負けたのだから、なおさらだろ。

俺は素直に袋の中身が気になり始めた。

だからその男の髪を鷲づかみにしてこっ言い放っただのだ。

「やだよ。これは戦利品、悔しかっただら取り戻しにきてみる」

そう言っただ俺は男に背を向け、裏路地の薄暗い影から抜け出し表の灰色の世界に溶け込んでいった。

途中コンビニによって帰っただら、うちのボロアパートの前についた頃にはもう日はとっくに暮れていた。

崩れかけたブロック塀の間を通り、明るい住宅街にひっそりと影を落とすアパートを見上げる。木造二階建てのそのアパートは木は腐りかけていて、階段や手すりなどの鉄の部分はことごとく錆びていて、一見廃屋にも見えてしまう。

そんなアパートの階段に腰かけて、俺は例の袋を開けた。

踊り場の壁には申し訳程度の電灯があるので、それを頼りに綺麗に結ばれていた紐を解く。

そして緋色の袋の口の部分を下にして二、三回振ると、軽い音と共に何かが手の平に落ちてきた。

俺はそれをそっとう宙にかざした。

あした。世界のまんなかで

小さなビニール袋に入ったそれを見て俺は思わずため息をついた。白い粉。要はクスリだ。あいつはコレを見つけられるのが怖くなつたから、あんなにあせっていたのだろう。

妙に苛立ってきた俺は、袋ごと投げ捨てた。

そしてそのまま二階に駆け上がり、ボタンと勢いよく自宅のドアを閉める。その振動で、天井から埃が舞い降りてくるが、気にせずたった一つの畳の部屋に座り込んだ。

久しぶりに激しく動揺している自分に、俺自身が驚いていた。

俺はあの袋に何を期待していたのか。あんなちっぽけな袋とどこにでもいそうなチンピラのどこに、自分にはない何を求めたのか。そんなこと俺自身が一番聞きたかった。

「なんなんだよ……」

俺の呟きに答えてくれる人はもう、この世界のどこにもいない。

あれからそのまま眠ってしまったようだ。

髪を掻きながら立ち上がった俺は、微かな腰の痛みを覚えながら思った。

一晩経てばこんがらがった頭も元通りになるかと密かに期待していたのだが、そうはいかなかつたようだ。

壁に寄りかかったまま部屋を見渡す。

テレビも、机も、何も無い部屋。あるのは万年床となつている布団と、小さな仏壇。

そこにある写真の人物の記憶はほとんどない。あるとすれば本当に僅かで、片手で握り締めることが出来る思い出しかないのだ。

その時、平凡な呼び鈴がなった。

一瞬驚きのあまり動けなくなる。もう何ヶ月もその音を聞いていない気がしたからだ。

そしてその呼び鈴を押した人物を見たとき、さらに俺の頭は混乱

してしまうことになるのを、漠然とだが感じていた。

「は、はい」

若干緊張気味に立て付けの悪いドアを開けると、そこには小さな少女が立っていた。

ぶかぶかセーターとさくらんぼの髪留めを付けた少女に、当然ながら面識はない。

「あの、どちらさんですか？」

「……」

「なんでもないなら閉めるぞ」

何も言わずにうつむいている少女に、イラッときた俺は本当にドアを閉め、制服を着替えようとする。

しかしまた呼び鈴がなって、作業を中断して上半身だけTシャツでズボンは制服のままドアを開ける。案の定、そこにはあの少女がいた。

「おい。なんのようなんだっておい!!」

俺の足をすり抜けて少女は部屋に乱入しようとするが、間一髪俺の手が少女の腕を掴んでなんとか引き戻した。

「なにすんだよ。ほら顔ぐらい見せろ」

面倒臭そうに言うと、少女はゆっくりと顔を上げる。

いたって平凡に整った顔立ちなのだが、俺は妙な概視感を覚え目を細めた。

そのせいだろうか、気づいたときには普段の俺なら絶対に口にしていないことを少女に言っていた。

「とりあえず中入れよ。話はその後だ」

灰色一色だった世界に、その瞬間何色かは分からないが、一滴の雫が零れた気がした。

あした。世界のまんなかで

それから数日、少女は俺の家に居座っていた。最初は嫌々だった

俺も少しずつ彼女の存在を俺の生活の中に取り込んでいけるようになった。そう、不思議なくらい簡単に。

それでも彼女に関して理解しがたい点はいくつかある。まず、ニュースにならないこと。数日とはいえ十歳前後の娘がいなくなつたとすれば親も心配しないわけない。

それでも、近所のデパートのテレビも拾った昨日の新聞にもそれらしい情報はない。

ほかにも彼女が一切口を開かないこと。彼女が窓から一時も動こうとしないことも、おかしいことだ。

「ほら、ちゃんと食え」

俺はお手製の料理を彼女の目の前に置いた。少女は窓からかじりつきっぱなしだ。

ため息を吐いて彼女のそばに座る。最近は学校に行くこともなく、ただこうして座っていることが多くなってきた。

彼女がきてから、この部屋も暖かくなってきた気もする。

彼女はただ窓の外を眺めている。俺はただそのそばで座っているだけ。

それだけで、大切な時間を過ごしていると確かに感じていた。

ただそんな時間はあつという間に過ぎてしまうものだというのも、俺はよく知っていた。

彼女が来て一週間と半分が経った雨の日のことだった。

学校に行こうと靴を履いていたとき、突然彼女が俺の前に立ちはだかつたのだ。

突然のことに狼狽する俺の手を彼女は掴んで走り出した。俺と比べると本当にひ弱な力だったが、なすすべもなく俺は彼女についていった。

そして俺がつれてこられたのは部屋の下の小さな庭だった。元は

小綺麗な庭だったのだろうが、今はただの荒れ果てた使い勝手のない空き地と言った方が正しいだろう。

「おい、お前何やってんだ」

彼女は俺の手を離し、伸び放題の雑草に飛び込んでいったのだ。俺も仕方なく彼女の近くに行き、彼女の手を見る。

小さく柔らかそうなその手は、今では泥水と泥だらけになっていた。だが、その手にはしっかりと何か握られている。

「これ……。何でお前がコレを」

それを見て、言葉をなくした。

そう。彼女が握っていたのは他でもない、俺が投げ捨てたあの緋色の袋だったのだ。

雨はいつしか激しくなり、俺達を容赦なく打ち付けた。

彼女は何も言わず、泣きそうな顔で俺を見ている。その顔を見て、俺はすべてを理解した。

窓をじっと見ていたのは、この緋色の袋を見ていたから。彼女に関する情報が流れないのは、この世に彼女が存在しないから。

あの白い粉。あれはクスリなんかじゃない。あれはきつと……。

「行くぞ」

俺は彼女の腕を掴んだ。彼女は泣きそうなりながらも、しっかりと頷く。

「お前に謝るのは、あいつを見つけてからだ」

自分の犯した罪をかみ締めて言うと、俺は全力で走り出した。

アパートを飛び出した俺達は傘も差さずに、あの商店街へと向かう。

だがそこにも、裏路地にもあいつの姿はない。全身の力が抜けるようだった。

よく考えてみれば、俺はあいつの声も姿も明確には覚えていない

のだ。

強く、手を握られて振り返る。

彼女がいた。その後ろに、いつかみた、思いでの向こうのあの人がいた。

今自分の手を握っているのはどちらなのだろう。

ふとそんなことを思ったが、すぐに立ち上がる。そんなことを考えている暇はない。そんな時間、彼女には与えられていないのだ。

「すいません。このへんで女子が亡くなった事件ってありましたよね」

「ん？ ああ確か、あっちの交差点でいつだったか車にはねられてたっけな。花も供えれてたし」

「ありがとうございます！」

通りすがりの太ったオヤジに尋ねると、あっさりとそう教えてくれた。俺は生まれて初めて心からお礼を言つと、走り出した。

「どうした？」

途中で立ち止まった彼女のほうに振り返った俺は目を大きく開いた。

彼女の体が透明になっているのだ。体の向こう側雨もはつきりと確認できるほどに。

パシヤンツと音を立てて、彼女が握り締めていた緋色の袋が水溜りに落ち、その色を濃くした。

俺は慌てて彼女の手を掴もうとするが、彼女の体をすり抜け勢いあまった俺はそのまま水溜りに突っ込んでしまった。

「頑張れよ！ もうちょっとだ、もうちょっとで……」

俺の伸ばした指の向こうで、彼女はあっけなく、泣きそう笑顔を残し消えてしまった。

「クソツクソクソ！！」

彼女の骨がすべて流れ出てしまったからなのか。それとも時間切

れだったのかわからない。

ただ、間に合わなかった。それだけは認めざるを得なかった。

拳を振り下ろした場所が水溜りで、飛び散った水が顔を濡らす。そんなものは気にならなかった。ただ、自分の犯した罪と過ちを償うことが出来なかったけどもなく、ただ彼女をあいっくに会わせられない。それが何よりも悔しかった。

その時、何かポケットの中に入っているのに気づいて、それを取り出す。

それを、そのものを見たとき、俺はまた走り出した。緋色の袋を、彼女の代わりに握り締めて。

伝えなくてはならないものが、そこにはあったのだ。

多くの車が走り抜けていく。正面には向こうの道へと渡る横断歩道。すぐ横にはまっすぐ伸びる名前の知らない街路樹が、緑の道を形作っていた。

そこにひっそりとたたずむ男が一人。その男の視線の先には薄い色の花束が、一人ぼっちで供えられている。

「渡したものがあんだ」

しばらくして、俺は口を開いた。殴られた頬がじんと痛む。

俺は差し出した緋色の袋を裏表をひっくり返すように、言った。

男は言われたとおり、濡れてぐしゃぐしゃになった袋をひっくり返す。そしてそのまま嗚咽して、こちらに背を向けた。

「いつてきます」

ただたどしい刺繍で、そこにはそう一言書かれていた。

短すぎる一言。でもきつと、それが彼女の一番伝えたかったモノなのだろう。

「馬鹿だよなあ、あいつ。何にも話せないからって、今更言われてもなあ」

男は震える声で、笑ってみせた。

大丈夫。こいつならきつと前に進んでいける。くじけそうになったら、今から数発殴られた後俺も手伝ってやるからさ。

空に向かって笑ってやった。

ポケットを探って、紙を取り出す。

「今、世界は何色に見える？」

かなわないな。と呟いて、空を見上げて呟いた。

「ああ、綺麗な空色だ。」

あした。世界のまんなかで

(後書き)

「俺」の背景や「あいつ」と「彼女」の関係はわざと何も書きませんでした。その意図を分かってくれたらうれしいです。

あした。世界のまんなかで

あした。世界のまんなかで

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8873d/>

---

あした。世界のまんなかで

2009年6月23日00時37分発行